

■ ポンドやユーロは基本戻り売り！？

前回更新分の本欄でドル/円について「(一目均衡表の)日足『雲』下限や89日移動平均線(89日線)などの節目があって、そこがサポートとなり得る」、「言わばドル高&円高のなかでドル/円が動きにくい状況となっている」などと述べた。

実際、先週6日ならびに今週10日のドル/円は、ともに日足「雲」下限や89日線を下抜けたものの終値は両節目よりも上方に留まり、其々が下値サポートとして立派に機能した。ことに10日の日足ロウソクは下ヒゲを伴う長めの陽線となり、あらためて終値で21日移動平均線(21日線)を上抜ける格好となった。なお、下図を見てもわかるように、これまでもドル/円の日足「雲」上限あるいは下限水準が節目として大いに意識されてきた。

結果、これも前回更新分の本欄で触れたが、いま足下で徐々に煮詰まりは始めている三角保ち合い(トライアングル)の上辺(10/4高値や11/12高値を結ぶライン)のブレイク、すなわち「トライアングルからの上放れ」にトライする可能性が再び浮上してきている。



思えば、この2018年のドル/円は、今のところ年初以来高値が114.55円(10/4)で年初来安値が104.64円と、その値幅は10円にも満たない。これは過去20年の最低記録更新ということになるわけで、市場関係者のなかには「あえて年末までに年初来高値を更新しに行く可能性も」などと指摘する向きもある。

ただし、今後もしばらくは基本ドル高&円高の展開が続くと見られる。それは、やはり今後もポンド安&ユーロ安の状況がすう勢的に続くと考えられるからである。

既知のとおり、昨日(12/12)は英国の与党・保守党がメイ党首(首相)の不信任投票を実施し、結果的に「信認」が決まったことでポンドが強く買われる展開もあった。とはいえ、これで英議会がすんなり離脱協定案を受け入れるかと言えば、それは決して容易ではなく、なおも「合意なき離脱」に突き進む可能性は濃厚と言わざるを得ない。

よって、ポンド/ドルで言えば今週10日にクリアに下抜けてしまった1.2700ドル処が今後は上値抵抗として意識されやすくなると見られ、そこはテクニカルに戻り売りが出てくるものと思われる。

一方のユーロもブレグジット問題をはじめイタリアの修正予算案やフランスのデモ、ドイツのメルケル首相の指導力低下や景気鈍化などなど、数多くの難題を抱え込んだままであり、やはり当面は本格反発に期待することが難しい。

本日(12/13)はECB理事会が行われる予定となっており、会合後にドラギ総裁が今後の域内景気見通しや当面の政策運営方針についてどのようなコメントを発することとなるのか、非常に興味深い。なお、ユーロ/ドルは基本戻り売り姿勢で臨みたい。(12月13日 12:15)